

北海道標茶高等学校の 森林教育についてⅡ

菅原 哲二

1993年度から演習林を利用した理科の巡検教育が行われているが1995年度も学校からの要望で昨年に続き巡検学習を行った。該当学年は普通科3学年二クラス77名と引率教員6名で二日間に分けて実施した。昨年同様午前9時過ぎから管理棟で酒井林長の概要説明のあと林内に入り、5、7林班学術参考林の管理道入口で5～7人の小グループに分かれ、それぞれのグループに演習林教職員1～2名が案内役として加わり約5kmの管理道を散策しながら説明し午前中の日程を終えた。昼食休憩後、大窪技官からカラマツ人工林の除伐作業について、合田技官からカラマツ間伐材の用途並びに流通機構について、谷口技官から使用機器（チェンソー、手鋸等）の正しい使い方や簡単な構造などの説明のあと各グループで5～7本伐倒、玉切り作業を体験させた。ここでは、日程と巡検について生徒の感想（抜粋）とその考察・反省をそのまま報告する。

目 的 演習林の見学を通して、標茶町の自然環境の特徴を知り、森林の持つ役割を理解する。

日程及び	平成7年9月11日	生徒39名	教員4名	演習林 教官	2名	技官5名
参加人員	平成7年9月13日	生徒39名	教員3名	演習林 教官	2名	技官6名

生徒の感想（抜粋）とその考察・反省

1. 日頃沢山の自然の中で暮らしている私たちですが、こんなにも間近で、足を止めて観察することは本当に少なかったと思います。この機会を大切にもっともっと沢山の植物を、自然の力をみるのができたなら、私たちの視野も広がり植物や生物にも関心を持てると思います。中でも私は間近でエゾトリカブトを見たのは感動しました。（女子）
2. 日頃自然に囲まれて暮らしているけれども、間近で見たり、木の名前を知るのは初めてのことで、とても楽しかったです。そして、初めて手に取ってエゾトリカブトを見ることができてとても感動しました。私が一番楽しかったのは自分で木を切ることができたことです。……私たちの班はコースターをつくるのに夢中になり沢山作って、今では、家の人たちが使っています。（女子）
3. 班行動に分かれて演習林の中を歩くときにも、ただ、黙々と歩いて、時々先生が立ち止まり、教えてくれる次第で、楽しく観察を……とはいかなかった。でも、この理科巡検で、木の名前やその特徴等を覚えることができたのは事実で、それはとても勉強になった。また、木を実際に切ってみる体験は、木片をもらえるからなのかわからないが、とても楽しく体験させてもらった。（女子）
4. 私たちが日頃体験できないような事をいろいろと経験してきました。例えば、今まで見たことのない木や葉を見ることができたり、自ら手で木を切り倒したり等、様々な事を学ぶことができたと思います。特に私は自分の手で実際に木を切り倒したり、切ったりできたことにとっても感動しました。……私はこの経験をいかして、これからも自分の身

近にある木や葉、そして植物などに関心を持ち、今まで以上に自然に対して目を向けていきたいと思います。(女子)

5. 私にとって大きな発見と観察力が養えることのできた1日だったと思います。私の住んでいる家の周りにもたくさんの木が立っています。普段は木の名前や葉の形など気にせず見ていました。しかし、この巡検をきっかけに家の周りを歩き葉の形などじっくり観察するようになりました。山道をぐるっと1周歩いたのはとても疲れましたが、実際の自分の手で木を切り倒した経験は、大変楽しく良い勉強ができた1日だったと思います。
- (女子)
6. 理科巡検のねらいはよくわからなかったけれど、教室の授業より良かったと思っている。思い出として残っているのは植物採集でトリカブトを取ったこと。理科巡検で確かに自然を見たり触れたりしたが、私たちの通った後のゴミが散乱していたのに矛盾を感じた。・ ・ ・ ・とても残念だったことがある。それは木の実はずそばに在るけれどもまだ食べられなかったのが悲しかった。・ ・ ・ ・巡検ノートというものを持ちながら行動しましたが、何も書けなかったので、無意味ではないかと思った。(男子)
7. 正直、私は北海道内で見られる木々の名前や何に使われている事など気にも止めていなかった。しかし、実際にいろんな種の木を見て、触れて、木の名前だって漠然と付けたのではなく面白い特徴を表したものが多く関心を持ってたと思う。植物の中で特に「木」と呼ばれる物には、人間の時間の流れとはまったく違う計り知れない年月を生き年輪を刻む。それに準じて木を伐採してから又元に戻る事の大変さなどはテレビで何度も見たり聞いたりするよりも50年を経てもササ原が広がるだけの土地を目の当たりにしてわかった。
- (男子)
8. 自然に囲まれ、自然を肌で感じ、自然について考える。理科巡検の目的を私はそう解釈した。しかし、いざ巡検を体験してみると、私の解釈なんかどこ吹く風、私が学んだのは違うことばかりだった。

室内で教えられた学習では、自然は減少していること等で、私は「私たちが自然を壊しているのだ、もっと自然は大切にすべきなのだ」と思った。ところが、森を歩き自然体験をする際、先程学んだことのまったく悪い例を目の当たりにしたのだ。私たちのスケッチや学習の為に枝を切り落としたり、葉を抜いたり、木を切ったり、とずいぶん自然破壊を行っていたのだ。

私は結局この巡検で何を学べばよいのか、誰の事を信じるべきなのかがわからなくなった。ただ一つわかったのは、森のなかで、私と友人がトイレにいきたくなり、とても不便な思いをした。

その時、私は確かに私たちにとって便利な生活を何と思うことなく送っているのだ、という事だった。

自然は大切だ、できることなら破壊などしたくない。でも、私は自分の命が大切だ、死にたくない。できることなら便利な生活もしたい。私たちはもうすぐ21世紀をむかえるが、そのとき一体どちらを選ぶべきなのだろうか。巡検の中で考えたことは、巡検で学ぶこととは違ったかもしれないが、私にとっては自然について考えるよい機会だったように思う。

(女子)

印象に残ったこと

アンダーラインは印象に残ったことが書いてある。昨年と同様「トリカブト」〔除伐〕が印象に残っているようである。今年は、昨年人気があった木の実はなっていなかった。実際手に

取ったもの、自分で体験したものの印象が強い。また、自然を観察するきっかけとなったという感想もあった。

実施上の問題点と反省

「黙々と歩いた」「何も書けなかった」等の感想は問題意識を持っていないことを表している。8. の生徒は本人の巡検の目的が大きすぎて消化不良になっている。さらに、自然破壊と観察・研究のための行為との区別がついていないし（森の時間スケールの中に納まる行為ならきっと自然は怒らないと思う）、除伐の意味も理解していない。これらは生徒の責任でなく、事前学習が不足していたためだと思われる。

昨年の反省に基づき、少人数の班編成にしテキストの課題を具体的にした。「黙々と」という感想はあるが、昨年と比べ格段にいろいろな事に注目し歩いていたと思う。ただ、生徒によって取り組みに差があるのは、先程述べたように、事前学習不足による。

事前学習は、興味付け・導入としての課題（木の葉の形、木の名前を覚える、木の実を採取する等）、森林の仕組み・役割を考える課題（ササ原、ダケカンバ林等）などの意味を教師側がしっかりおさえ、行う必要がある。また、課題の配列について再考の必要がある。

以上、高校から提出された巡検レポートををそのまま列記したが、受け入れ側としては、5 kmの道のりを1時間30分で説明するのは無理があるように思われる。教師から述べられているように演習林としても、事前学習的な予備知識を与えることによって、より内容のある成果が期待できるものと考えられる。

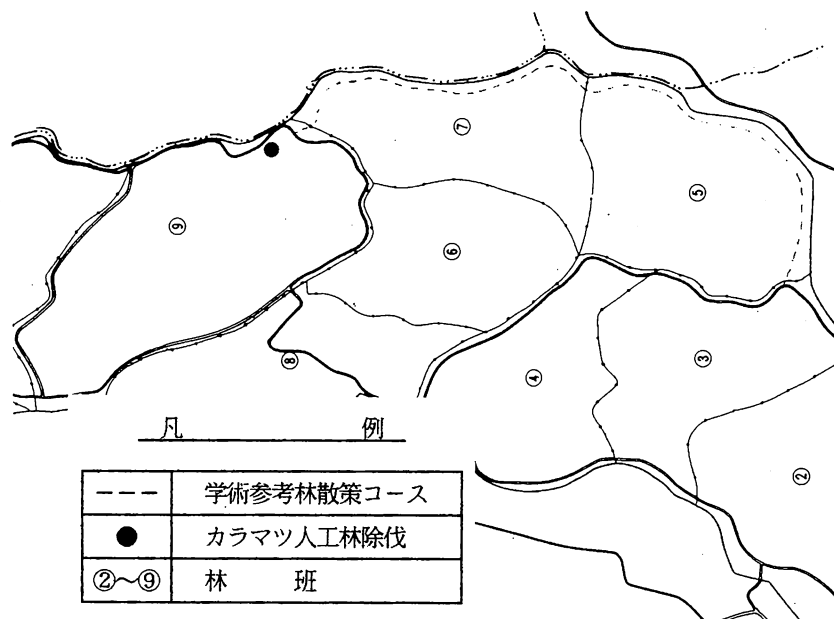


図-1 巡検コース